

取組：小・中・高等学校を通して一貫性のある英語教育を充実する

当該地域の特性等を踏まえた課題分析の視点

- | | |
|---------------------|---------------------------------------|
| ① (課題) 言語活動の状況 | (考えられる要因) 文法説明や練習問題等に費やす時間の割合が多い |
| ② (課題) CAN-DOリストの活用 | (考えられる要因) 意義及び公表方法の例示等を十分に示せていない |
| ③ (課題) 小・中・高等学校の連携 | (考えられる要因) 異校種の教員で情報交換や交流する機会が設定されていない |

Plan

■取組計画

- ①効果的な言語活動の事例を開発・実践
- ②CAN-DOリスト及びパフォーマンス評価例を作成・研究
- ③小・中・高等学校の英語担当教員対象の研修を実施

■体制

検討委員会（大学教授、各校種研究会会長、再委託先市教育委員会指導主事、教育庁県立学校教育課・義務教育課・教育センター学びの丘・教育事務所指導主事）
各課題に応じた研究開発チーム

Do

- ①言語活動の状況について
 - ・協力校における効果的な言語活動事例を集めた事例集を作成
 - ・言語活動を中心とした授業の在り方・指導方法について学び、教員の指導力向上を目指した研修を実施
- ②CAN-DOリストの活用について
 - ・CAN-DOリストを活用したパフォーマンステストと定期テストの作成等に関する講義・演習を含む研修を実施
 - ・再委託先と連携して小中7年間を見通したCAN-DOリストを作成
- ③小・中・高等学校の連携について
 - ・全校種の英語担当教員を対象にした研修を7地方で実施し、小学校英語専科指導教員の公開授業及び研究協議を通して、異校種の教員が交流する機会を設定

Check

※R3年度英語教育実施状況調査結果（）はR1年度調査との比較

- ①生徒の授業における言語活動時間の割合【50%以上】
 高等学校 66.1% (↓) 中学校 71.6% (↓)
- ②学習到達目標の整備状況
 高等学校 設定 100% 公表32.0% 達成状況の把握62.0% (↓)
 中学校 設定 100% 公表93.2% 達成状況の把握 100% (↑)
 小学校 設定98.7% 公表60.0% 達成状況の把握92.2%
- ③小中連携 94.9% (↓) 中高連携 12.9% (↓) 小高連携 9.7% (↑)

Action

言語活動の状況ははまだ課題が残る。言語活動の充実を図る手段としてICT機器の効果的な活用事例を考案する。また、CAN-DOリストの学習指導・評価への活用方法等について検証し、児童生徒の発信力強化のための効果的な指導と評価について研究する。

令和3年度に実施した「地方別外国語教育研修」において、全校種の教員が小学校英語専科指導教員の公開授業を参観し協議するとともに、異校種間の情報を共有したことは、小学校との接続を踏まえた中学校や高等学校の指導方法の改善・充実にもつながった。継続した取組を行うことにより、学校種間連携を促進するとともに、全校種の教員の指導力向上を目指す。

成果の普及

- 各課題に応じた研究開発チームの取組事例
 - ・協力校が作成した効果的な言語活動事例
 - ・再委託先と連携した取組事例
 - ・定期テスト及びパフォーマンステスト事例



<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/501100/d00205828.html>

課題

言語活動の充実 《クラスの生徒間に英語の学力差がある中、いかに効果的な言語活動を実践できるか》

具体的な取組と工夫

- 授業内での言語活動(ペアワークを基本とすることにより全員が参加)
 - ・ 語彙インプット 発音確認、英英辞典の定義とのマッチングなど、ワークシートを活用しさまざまなパターンで行う。
 - ・ TF Questions 答え合わせはペアで簡単な英語を使って行う。
 - ・ Open Question 自分の考えを英語で書かせる。
 - ・ 音読 リピート、ペアで音読、サイトトランスレーション、空所補充などから組み合わせて2、3回行う。
- 学年統一の言語活動とパフォーマンステスト(教科書本文の内容に絡めて、隔週でFLTと実施)
 - 2学年 6月 スピーチテスト(140語) “The Famous Person Whom I Respect“
 - 9月 ライティングテスト(60語+40語) (ディベート準備を兼ねて、論題に対して賛成・反対両方の立場で書く)ミニディベート(論題“Restaurants in Japan should introduce the use of doggie bags.”)
 - 12月 インタビューテスト(英検準2級～2級レベルのインタビューテストを実施)

成果

(授業内)

- ・ 毎時、英語を話したり音読したりする機会を確保した。
- ・ 英語での指示が十分通るようになった。
- ・ 89%の生徒が能力向上を実感した。(101名対象にアンケート実施)

(学年統一の言語活動とパフォーマンステスト)

- ・ 公平な評価ができ、教員間チームワークや継続性(試行錯誤しながら次へ繋ぐ)が向上した。
- ・ 生徒はParagraph Writingに慣れ、発表ではアイコンタクトができるようになった。
- ・ 82%の生徒が能力向上を実感した。(101名対象にアンケート実施)
- ・ 英検受験者数が増加した。(50名/101名中)
準1級(2次準備中2名), 2級取得6名(2次準備中10名), 準2級取得26名(2次準備中6名)

課題及び改善案

(授業内)・ペアに頼り切っている生徒がいる。

→ 席替えをするなど、ペアを頻繁に変える。

・ 初読での理解力が低い。

→ 速読教材などを用いて多読させる。

(学年統一の言語活動とパフォーマンステスト)

・ 教科書とのずれが生じる→年間計画で調整する。

・ 抑揚をつけない生徒がいる。

→ 授業の中で音読テストなどを取り入れる。

・ 受動的な生徒がいる。

→ 生徒がワクワクする活動を取り入れる。

課題

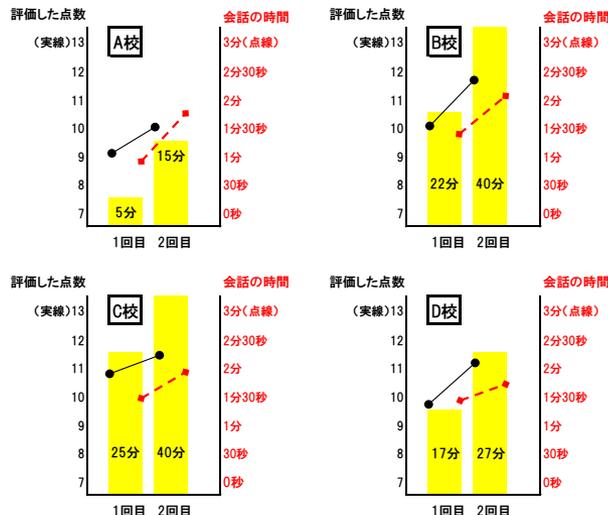
中学校における課題は授業内の言語活動の時間が少ないことである。原因として、数値による効果測定とそれに基づいた客観的な課題把握やフィードバック等ができていなかったことが考えられる。課題解決に向けて、数値による効果測定を行うことで、教員の意識改革に取り組むたい。また、研究会組織・教科会の活性化や、小中で連携し外国語教育にチームとして取り組む体制の強化も併せて行う必要があると考える。

具体的な取組と工夫

■中学校英語教員の授業内での言語活動の時間測定と、生徒の英語運用能力測定

授業をビデオ撮影し、生徒3人一組になり、3分間自由に英語でやり取りを行うパフォーマンステストを実施。その後、授業及びパフォーマンス評価の映像を見ながら、授業改善、言語活動の充実のための研修を行った。生徒の英語運用能力がどの程度変化しているかを調べるため、12月にもう一度授業のビデオ撮影とパフォーマンステストを行った。その結果が右のグラフである。

黄色の棒グラフが50分授業の中で言語活動を行っている時間。黒い実線グラフがルーブリックに基づき採点した平均値。赤い点線グラフが、3分間のパフォーマンステストの中で英語を話していた時間である。



言語活動と英語運用能力の関係を示したグラフ

■教員研修

小学校、中学校ともに授業改善に活かせるように、数回の研修会を実施。パフォーマンス評価の活用方法や定期テストの作成方法に特化し、自分が作成したテストを振り返り、他教員が作成したテストを共有するなど質の向上を目指した。

■小学校でのCAN-DOリスト作成と外国語クイズでの経年比較

文字定着と情意面との相関を計るとともに、指導の妥当性を測定するため、小学校において、文字定着の状況調査(テスト)を実施し、文字の定着度と文字定着を目的とした学習に対する児童の情意面を計り、指導との関連性を調査した。

成果

■パフォーマンステストを通して、授業における言語活動の時間と生徒の英語運用能力について明らかな相関関係があることがわかった。代表4校の授業動画や生徒の変容を共有し、教員の授業力向上に役立てるとともに、言語活動の充実に向けての効果的な教材ができた。

■作成した小学校のCAN-DOリストの活用や研修会の実施、参考本の配布を通じて、各小学校での定着に向けた取組や、言語活動の充実がみられた。

課題及び改善案

■作成した小学校のCAN-DOリストや小学校外国語で作成した成果物などを活用し、小中連携を強化したい。また、今年度はコロナ禍のため実施できなかった小中の授業参観や模擬授業、7年間を見通したカリキュラムの作成などを推進したい。

■英語研究会・校内教科会の活性化がまだ進んでいないため、チームでの授業の互観や、教材の共有をさらに進めていきたい。

課題

CAN-DOリストの活用について、本市において以下の課題があった。

- ①CAN-DOリストが見つらかったり、使いづらいために、実際の活用が進んでいない。→目標を設定した後の活用を進める必要がある。
- ②児童・生徒との共有が進んでいない。
- ③小学校から中学校への接続のための活用ができていない。

具体的な取組と工夫

見通す
(年間計画を立てる)

- 各領域の達成目標を確認したうえで、単元末に実施する言語活動にあわせて「記録に残す評価」を明確にする。
- 各領域の達成目標はプルダウンメニューで「記録に残す評価」だけを示すことができるようにしている。
- 年間指導計画と一体したリストであるため、「記録に残す評価」について年間通じて領域に偏りなく設定しているかを確認できる。

実践する
(共有する)

- 「記録に残す評価」を明確にすることで、振り返りシートの内容を明確にしたり、児童・生徒と目標を共有したりすることにつながる。
- 各単元で実施する言語活動(パフォーマンステストを含む)と評価が明確になることで、指導と評価の一体化につながる。

単元末の言語活動例を示し、活動例に応じて「記録に残す評価」を設定している。

改善する
(小中連携)

- 小中学校7年間のリストになっているため、小中学校それぞれの達成目標を確認できる。それぞれの校種で目標を確認したうえで、中学校区ごとに、リストを基に外国語の授業について連携を進める。
- リストの見直しを行い、各学校の実態に応じたものに改善する。

学習達成目標 (can-doリスト形式)

聞くこと	読むこと	話すこと(やりとり)	話すこと(発表)	書くこと	単元末の言語活動例
話し手が経験したことについて話される内容の概要を捉えることができる。			思い出や経験したこと、気持ちなど簡単な語句や文を用いて即興で話すことができる。		★春休みの思い出について、行ったところや自分が体験したことについて発表する。
	旅行について報告する文章を読んで概要を捉えることができる。	自分の予定について、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができる。		簡単な語句や文を用いて情報を整理しながら、名所を紹介する文章を書くことができる。	★旅行の計画を立て、質問をしたり、答えたりする。

成果

- 各小中学校において、学習到達目標の公表及び目標の達成状況の把握が進んでいる。

課題及び改善案

- 「記録に残す評価」にフォーカスするリストであるが、「記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う」ことの重要性を理解したうえでの活用が必要⇒研修会の実施
- 小学校から中学校へ、よりスムーズな接続のための活用が必要⇒中学校区単位のリストの見直し・改善の実施